

保育実習指導のあり方を考える I
—実習先（保育所）のアンケート調査から見えてきたもの—
Considering Practice Guidance for Teaching I
— A Study from the Results of a Questionnaire in a Nursery School —

塩 津 恵理子*・山 口 香 織**

要 旨

本稿の目的は、保育実習 I 及び保育実習 II の実習先（保育所）に対してアンケート調査を実施し、本学の学生の実習に対する意識や傾向を捉えるとともに、保育実習指導の内容が実際の実習で活かされているかどうかを検討した。その結果、実習生としての心構え（言葉遣いや挨拶）、実務（時間厳守や期日管理）はよい評価に繋がっていることがわかった。一方、実習生の積極性や自主性には大きな課題があることも明らかとなった。今回の結果を踏まえ、保育の質向上に繋がる保育実習指導内容と指導法の見直しが求められる。

キーワード：保育者養成 保育実習 実習指導

1. はじめに

保育所（園）においては、実習生を受け入れるにあたって、実習中の体制や指導はどのように行われているのだろうか。現在、保育現場では社会的な要請が増大し、保育を必要とする子どもの保育だけでなく、地域の子育て家庭支援の役割を果たすために、数多くの取り組みや行事が行われている。また、乳幼児とふれあう機会が減少している現状において、中・高校生の体験学習やボランティアの受け入れと共に、多数の養成校から時期を変えて実習生が次々とやってくる。これらを受け入れて、指導を行っている保育の現場は多忙を極め、多大な負担感があるのではと推察される。

このような状況のもと、保育現場では実習については、保育士として必要な専門的知識や技術が学べる実践の場として、現実の子どもの姿や保育の内容を伝え、保育士としての使命感や実践力の基礎を高める場として認識され、実習指導が行われていると考える。

そこで、将来の保育士を養成する養成校と保育所等実習施設が共に連携、協働関係のもとで

* 神戸親和女子大学 発達教育学部 児童教育学科 教授

** 神戸親和女子大学 発達教育学部 児童教育学科 講師

実習指導に取り組んでいるかということ、それぞれの場で行われている指導内容を適切に把握しているだけでなく、お互いの情報、認識の共有がまだ十分でないといえる。

厚生労働省雇用均等・児童家庭局長通知「保育実習実施基準」において「指定保育士養成施設の所長は、教員のうちから実習担当者を定め、実習に関する全般的な事項を担当させることとし、また、実習施設においては、その長及び保育士のうちから実習指導者を定めるものとする。これらの実習指導者は、保育実習の目的を達成するため、指定保育士養成施設の実習指導者が中心となって相互に緊密な連絡をとるよう努めるものとする」としている。

今回のアンケートを参考に、現場が実習生に求める学ぶ姿勢を確認し、養成校と実習園との連携、協働関係の強化の必要性を把握すると共に、充実した保育実習が出来るよう実習指導担当者として今後の指導のあり方を探ることとする。

2. 保育実習Ⅰ・Ⅱと保育実習指導Ⅰ・Ⅱの概要

神戸親和女子大学における保育実習（保育所）の実施要領を表1に示す。

保育実習は、講義で学んだ保育の専門的な知識や技能を、実際の子どもたちとの関わりの中で確かめ、より深めていく貴重な場である。学生によって保育実習が有意義なものとなるためには、実習の事前事後指導の持ち方が重要な役割を担うことになる。

本学では、保育実習の目的を達成するために7つのねらいを設けている。それらは①保育所（園）の役割や機能について理解する②保育士の職務内容や役割について理解する③一日の流れを知り、保育課程や指導計画について全体的な理解をする④指導計画と活動の展開、その実際について理解する⑤入所児との関わりにより、乳幼児期の子どもについて理解を深める⑥実践を通して保育の方法、技能の修得をする⑦保育所（園）における子育て支援について理解するである（表1）。

初めての实習として位置づけられる保育実習Ⅰは2年次生が対象で、実習時期は9月上旬～中旬にかけての2週間である。その際、保育実習のねらいは、上記のうち「保育所（園）の役割や機能について理解する」、「保育士の職務内容や役割について理解する」、「一日の流れを知り、保育課程や指導計画について全体的な理解をする」の3つが当てはまる。ねらいを達成するために、事前指導では実習の意義や目的の理解にはじまり、実習生としての心得や礼儀、記録の書き方や保育技能に至るまで、多岐にわたっている。また、現場での実習に結びつく手遊びや手作り教材の作成および発表など実技面の学びも取り入れている。特に、実務的な内容（書類の書き方、提出方法、体調管理とスケジュール管理）と日誌などの記録に関しては、重点をおいた指導を行っている。実習終了後は、全体での保育実習の振り返りと個別での面談を実施しており、学生が各自の課題を見出す機会としている。

また、3年次になると保育実習Ⅱ（保育所）か保育実習Ⅲ（施設）のどちらかを選択し、8月下旬から2週間の期間で実習が行われる。保育実習Ⅱは前回の実習を踏まえてより発展的に

実施されることから、「指導計画と活動の展開、その実際について理解する」、「入所児との関わりにより、乳幼児期の子どもについて理解を深める」、「実践を通して保育の方法、技能の修得をする」の④～⑥がねらいの中心となる。そのために保育実習指導Ⅱでは、全日実習をする機会が多いことが想定されるので、保育実習Ⅰで経験したことや、気づき、現場で学んだことを参考に、指導案の作成に時間をかけている。指導案作成上の基礎理解を深めるために今一度、指導案の「ねらい」や「内容」設定についての講義から学びを深め、子どもの姿を適切に捉えて、保育の意図や流れを理解し作成できるよう取り組んでいる。実習後は保育実習Ⅰと同様個人面談を行っている。2度目の実習においては実習への不安感は少なくなり、意欲的に実習に臨む学生の姿がうかがえる。実習で保育の楽しさや難しさも味わう中で、更に実践力を身に付けたいとの意識の向上もみられる。

表1 神戸親和女子大学における保育実習（保育所）の実施要領

<p>1) 保育実習の目的 保育実習は、大学で習得した、あるいは習得しつつある教科全体の知識や技能を基礎とし、これらを総合的にとらえ、実践に応用する力を養うため、児童や保育者との直接的な関わりを体験することにより、保育の理論と実践の関係について習熟することを目的とする。</p> <p>2) 保育実習のねらい 保育所（園）での実習 ①保育所（園）の役割や機能について理解する。 ②保育士の職務内容や役割について理解する。 ③一日の流れを知り、保育課程や指導計画について全体的な理解をする。 ④指導計画と活動の展開、その実際について理解する。 ⑤入所児との関わりにより、乳幼児期の子どもについて理解を深める。 ⑥実践を通して保育の方法、技能の修得をする。 ⑦保育所（園）における子育て支援について理解する。</p> <p>3) 保育実習の段階と内容 (1) 実習の段階 保育実習Ⅰ…保育者の指導を受けながら保育活動を体験する。 〈1週目〉観察・参加実習 〈2週目〉指導実習（部分実習） 保育実習Ⅱ…保育者の指導や助言を受けながら、自ら指導案を作成し保育を行う。 〈1週目〉参加実習 〈2週目〉指導実習（全日および半日実習1回以上） a) 部分実習：実習生が一日の活動のある部分を担当する形で行う。 b) 半日/全日実習：実習生が半日および一日の全体活動を担当する形で行う。</p> <p>(2) 保育所（園）実習の各段階における実習内容 ①オリエンテーション i) 保育所（園）の概要（沿革、保育の方針や目標、特徴等）を理解する。 ii) 保育所（園）の実態（日々の保育の流れ、子どもの状況、保育士の活動状況等）を理解する。 ②観察実習 i) 一日の生活や保育の内容を理解する。 ii) 保育室や園内の環境について把握する。</p>

③参加実習

- i) 子どもの個別理解、個々の成長に応じた対応の理解、子ども同士の関係を理解する。
- ii) 子どもの生活と、保育士の関わりを理解する。
- iii) 保育士による遊びの場面設定と教材の準備、指導計画との関連について理解する。
- iv) 保育目標や保育方針と日々の活動や保育課程、指導計画との関連について理解する。
- v) 清潔、安全等への配慮、遊び指導のための環境構成等について、その意義や方法等を学ぶ。
- vi) 登所（園）、降所（園）時における保護者とのやりとり、連絡帳の記入、園だよりの作成等について観察をとおして、家庭との連携の必要性と方法について理解する。

④指導実習（部分・全日実習）

- i) 自分で作成した指導計画と実践との関係、予測と実際との相違とそれについての対応策を体験的に学ぶ。
- ii) 年齢や場面に適したグループの構成、保育形態等を学ぶ。
- iii) 言葉のかけ方や接し方、教材の選択、遊具や用具の活用の仕方など、指導技術の基礎を身につけていく。
- iv) 実習後は、疑問点・反省点を整理し、自己評価する。

3. 対象と方法

調査対象は、平成27年度の保育実習Ⅰ（保育所）及び保育実習Ⅱで実習を行った実習園（保育所）と同年度末に卒業する学生が就職でお世話になる保育所（園）の94カ所である。

調査期間は、平成28年1月中旬～2月上旬で、郵送法による質問紙調査を実施した。調査票は、園名・記入者名を無記名とし、返信用封筒を同封し回収した。回収率は55.3%であった。

調査内容は、①本学の実習生の実習態度、②本学の実習生の保育技術の2項目について、それぞれに「特によい点」と「努力を必要とする点」を回答選択肢からの回答を求めた。また、「努力を必要とする点」については、具体的な状況や意見を把握するために自由記述欄を設定した。

なお、保育所（園）での実習は保育実習Ⅰ、Ⅱを通し、同じ実習園で実習した学生もいれば、実習Ⅰ、実習Ⅱどちらかの学生もいる。また、今回のアンケートは実習を行った直後で回答を得たものでなく、またその年の実習生が対象の評価というわけではない。よって、本アンケート調査からは、本学の「保育実習」全体の傾向について分析を行い、本学の学生の実習に対する意識や傾向、本学の保育実習における指導課題や問題点を明らかとする。

4. 結果と考察

1) 実習態度に関する項目

図1は実習生の実習態度に関して「特によい点」について尋ねた結果である。上位3項目では、①「言葉遣い」が17.8%で最も高く、次に、②「挨拶」16.8%、③「期日管理」・「時間厳守」11.9%となった。これら3項目についての考察を以下に述べる。

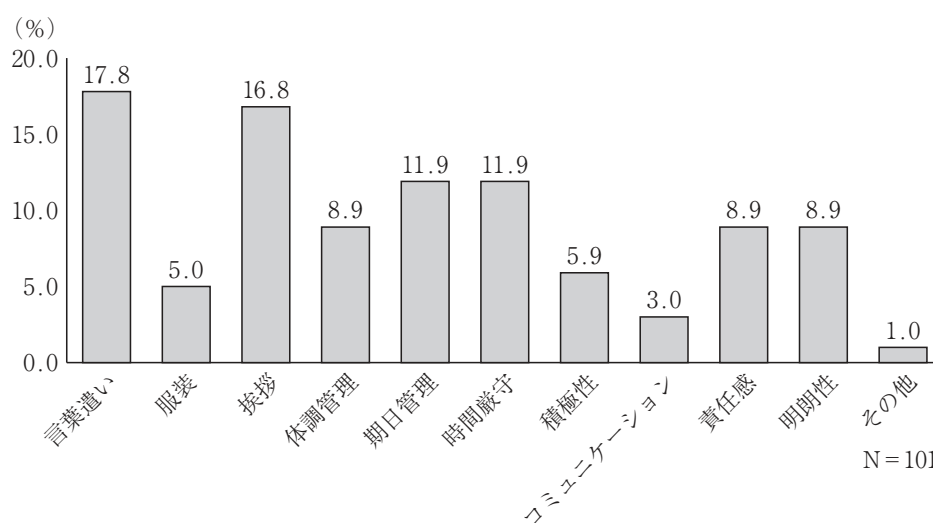


図1 実習生の実習態度（特によい点）

①言葉遣い

11項目の中でポイントが一番高い評価である「言葉遣い」「あいさつ」は実習をする際の基本的な実習態度として実習生自身が意識して心がけていたと思われる。よく言えば日常生活の反映ともいえるが、学内で耳にする学生同士の会話からはこの評価が適切であるかと危惧する場面もある。記載事項で「実習終了帰宅前に『お疲れ様』という言葉に違和感があった」との意見があった。実習事前指導の中でも、使用しないよう告げているにもかかわらず、アルバイトなどで身についた言葉がつい、口について出てしまったと考えられる。

②あいさつ

設問項目では良いとのポイントが高かった「あいさつ」であるが、記述の中でいくつかの意見が記載されている。「人として当たり前のことなのでしっかり指導をしてください」とある。

「あいさつ」の大切さ、必要性は子どものころから言われていることであり、生活の中で身につけている行動と言える。しかし指摘されるということは、していないと「気がつく」「気になる」ことであり社会生活においては「出来て当たり前」の常識的な行動である。なぜしないのか、出来ないのか。これも日頃の姿の表れなのかもしれない。

③期日管理

「期日管理」は日誌など、書類の提出日を守ることで、決められ日時を守ることは、保育現場にとっては、出来て当たり前との認識である。記録を記入するのにかなりの時間を要していた実習生もいたと思われるが、多くの実習生が期日を守って提出していたと評価されている。

次に、図2は実習生の実習態度に関して「努力を必要とする点」について尋ねた結果である。「特によい点」では各項目に大きな差は見られなかったが、「努力を必要とする点」では、他の項目に比べ①「積極性」(35.9%)が最も高い結果となった。

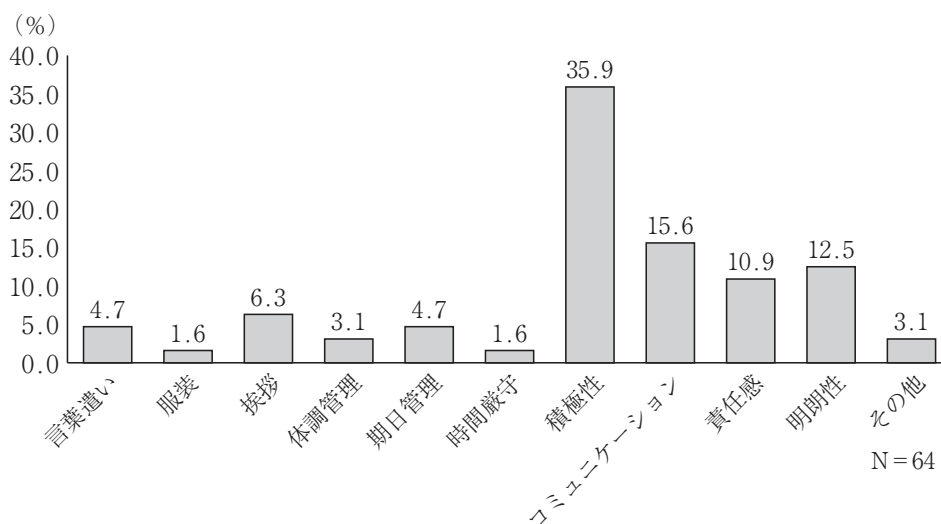


図2 実習生の実習態度 (努力を必要とする点)

①積極性・コミュニケーション

「努力を必要とする点」の「積極性」「コミュニケーション」では実習生は総じて緊張しているとの前提のもと、実習の前半は寛容に受け止めてもらっているが、実習期間を通し変化なく、積極性や実習への意欲が感じられないと評価は厳しくなる。記述にも「保育をする上で質問したり、考察することなど積極的にすることが少なかった」「失敗することが悪いことではないので、子どもとの関わりや、部分指導等大胆に取り組んでほしい」「真面目で一生懸命実習をしているが、積極的な行動、発言を心がけてもらいたい」「コミュニケーション能力や積極性は学生の時にしっかり身に付けてほしい」などの要望があった。

保育現場においては、実習生には積極的な態度が求められており、それが実習生の自覚と意欲を問うものとして現場評価の1つの判断基準となっているといえる。

「言葉遣い」「あいさつ」等は相手に対して表出することで「できている」と本人自身も自覚できるが、「積極性」となると、どこまで行動を起こすと積極的とみなされるのか、どの範囲までなのか、何に対してなのかと自分の行動の判断の基準は不確かである。また実習中は積極的に行動しようとしていたにも関わらず、いざ実際に保育現場に臨むと自信のなさや心の余裕もなく思うように動けなかった学生も多い。また、保育現場の慌ただしい日常の中で、実習生が保育担当者にいつ質問したらいいのか、タイミングをつかみかねるなどの状況において「傍観者の態度」としてとらえられることもあるかもしれない。

実習態度に関しては実習事前指導において“実習の心得”として学生には十分伝えている内

容であり、「生活リズムを整え、健康には十分留意する」「服装・言動に注意すること」「積極的な態度で実習に臨むこと」「先生方からの指導・助言を積極的に求め、謙虚な態度で臨むこと。また報告・連絡・相談を心がけること」など実習生の心構えや基本的態度をしっかりと身に付けておくことは、実習園から、養成校に向けた要望として求められている内容といえる。

2) 保育技術に関する項目

図3は実習生の保育技術に関して「特によい点」について尋ねた結果である。最も高い結果となったのは、「日誌」24.58%で、続いて「子ども・利用者とのかかわり」17.0%、「絵本の読み聞かせ」14.9%となった。

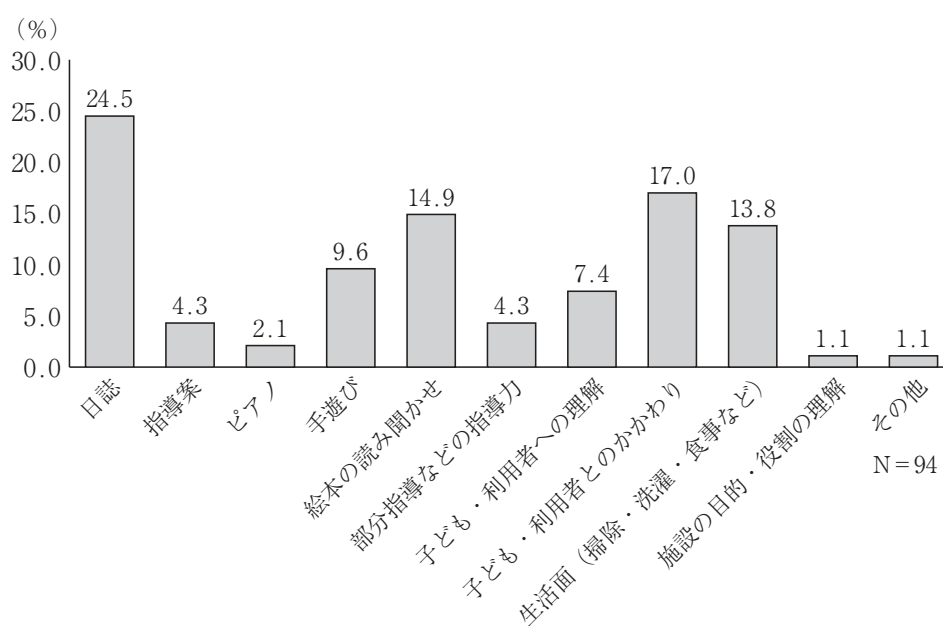


図3 実習生の保育技術（特によい点）

①日誌

「日誌」に関しては「特に良い」の項目のポイントが一番高く、今回のアンケート以外でも実習訪問時などで「日誌は丁寧にしっかり書けています」と良い評価をいただくことが多い。しかし、記述欄では「楽しかった、嬉しかったと感想を書くのではなく、考察してもらいたい」「何枚にもわたり長々と書く日誌は、書く方も、見る方にも負担になるので、ポイントを押さえて書くように指導させてもらっている」「日誌、指導案を書くのに苦労している人が多いように思う」など述べられている。日誌の書き方については事前指導においてかなりの時間をかけて指導しているが、子どもの姿や保育の展開等経験していないことを、想像し予想して書くことは学生にとっては難しいと苦手な分野でもある。しかし

いざ、実習に行き「特に良い」と評価されているということは、実習園において添削してい

ただき、状況を踏まえての書き方を学び、書き直す中で身につけ、学生自身も努力した結果ともいえる。

ただ、先に書いたように、日誌の書き方でこれまで多数指摘される点は、「一日の保育活動の流れを細かく追う事に力点を置き、今日の保育のポイントは何だったのか、自分は何を学んだかが記入されていない」であり、見たことや実際にあったことを忘れず書こうとすると何枚にもなり、書くという事が目的となってしまう。それらをどの程度まとめて文章にするのか、保育のねらいや気づき、感じたことを掘り下げるなど、書き方の工夫をすることや、日誌を書くことによって相手に伝える表現力を身につけられ、書くことによって事実の整理や理解が進むことを学びとる必要がある。

②絵本の読み聞かせ

選択項目には「手遊び」があるが「絵本の読み聞かせ」の項目のほうがポイントが高かった。「手遊び」も「絵本の読み聞かせ」もどちらも保育を行う上で欠かせない保育の技である。授業の中でも学生同士で絵本を読みあったり、手遊びをしてみるなど、目の前に子どもがいなくても実践の機会があり、子どもの想像力など育む多くの絵本の魅力を知ることによって、より実践力が高められ身に付けられやすい保育技術の一つであるといえる。

また学生は事前に実習にいくまでに、何度か読み慣れた絵本を実習先に持参し、ある程度自信をもって読み聞かせが出来ていたと思われる。

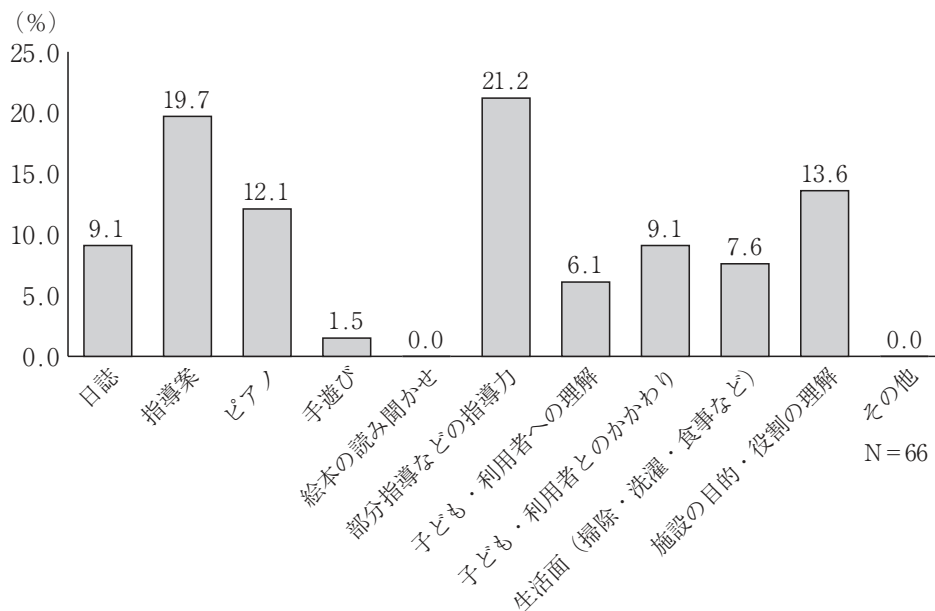


図4 実習生の保育技術（努力を必要とする点）

図4は実習生の保育技術に関して「努力を必要とする点」について尋ねた結果である。「部分指導などの指導力」が21.2%と最も多く、「指導案」19.7%、「施設の目的・役割の理解」が

13.6%であった。

①部分指導などの指導力・指導案

部分実習及び全日実習で行う指導案を、授業においても子どもの年齢に合わせて、いくつか立案し実習に備えた。今まで学んだ保育に関する知識と、実習に関する指導書等を参考に考えた指導案に基づく保育は、実際の子どもの姿、クラスの子どもの人数構成や保育の形態、クラスの雰囲気等、予想していた事柄と実際の保育との違いなどによって、指導力を発揮することが難しかったとも言える。そして、実習生にはどのような、どの程度までの指導力が求められているか、実習園によってその捉え方は様々である。

保育実践は子どもの生活実態を理解することから始まるといわれている。そしてその生活を見通し作成した指導計画をもとに保育を柔軟に実践していきながら、その保育実践を省察、評価、改善し理解を深めていくことが求められている。2週間という実習期間の中で改善し、また新たに指導案を考え直し同じ保育内容で保育を行う機会は無状態とは言え、実習の保育担当者から指導や指摘を受けたことを何らかの形で示そうとする姿勢が重要となってくる。

②施設の目的・役割

保育所（園）での実習で、この項目のポイントがかなりあるということはどう解釈したらいいのか。保育所以外の児童福祉施設の目的・役割についての理解は十分とはいえない面も確かにある。保育所（園）実習においても、実習園に対しての保育方針や保育の方法など、保育に対する理解という基本的なことが足りていないと解釈も出来る。オリエンテーションで得た情報から実習園の特徴や保育方針などを知り、詳細でないしる理解につながると思われるが、実習に向かう意欲意識もこの項目からも感じられるということであろう。

5. おわりに

今回のアンケート結果は、実習園が数多くの実習生を受け入れている中、本学実習生の実習半年後のアンケート回答であり、実習直後の実習生の個人的な評価からでなく、本学学生の総体的な実習に向き合う姿勢、傾向、実習への取り組みの状況が示されているといえる。アンケートの「努力を必要とする具体的な状況」の記載で多く書かれていた「積極性」は実習生の基本的姿勢の一つであり、実社会とかかわる保育現場ではコミュニケーションスキルは保護者対応や地域支援の必要性からも、今後より強く求められる資質と言える。そして実習生には、受け身でなく、自主的、主体的な行動と共に現場の職員の一人として参加しているという自覚と責任が求められていることを、これからも養成校においてしっかり学生に伝える必要があると考える。

近い将来、保育現場で共に保育に携わる後進の保育士養成のために実習園は、意欲的・献身

的に指導していただいている。各実習園での実習経験内容、指導内容、方法など記録の書き方、また実習評価の基準も一定ではない。それでも今回のアンケートからは、本校の学生の気質も見えてくる。「誠実で真面目」であるが「積極的な姿勢」が求められると捉えるが出来、礼儀・態度など保育者としての基本的態度の重要性が示されている。

実習指導担当者は、学生の保育者になりたいという強い意志や意欲が「積極性」として発揮できるよう、保育の専門的知識、技術のみでなく「健全で健康な生活を送ることができる能力や適応性と共に、子どもを愛し、理解し、尊重する基本的態度と、それに基づいた真に豊かなヒューマン・リレーションを持つこともできる人間性と感性」と定義される“保育マインド”が持てるよう、一人一人丁寧できめ細やかに指導していく必要がある。

また、実習を行う上では学ぶべき課題、目標は数多くある。実習園においても短い実習期間の中では保育の醍醐味ややりがいなどは伝えきれない。しかし、実習期間だけで学ぶことがすべてではなく、経験を積んでこそ身に付く保育の知識、子ども理解、保育技術があることも実習体験を通し知り、学び続ける大切さを学生自身に感じ取ってもらいたい。

そして今回アンケートにおいて回答いただいたように、今後も学生の保育現場での実態を共有し、保育マインドをしっかりと身に付けた保育者を実習園と養成校が連携、協働して育成していきたい。

引用・参考文献

- ・全国保育士養成協議会「保育実習指導のミニマムスタンダード」北大路書房 2007
- ・厚生労働省「保育所保育指針解説書」フレーベル館 2008
- ・中村 博武「保育実習生受け入れ保育園の問題意識」プール学院大学研究紀要第44 2004
- ・佐野 美奈「保育所実習（保育実習Ⅰ）と保育実習Ⅱの実践的学びによる教育的効果」大阪樟蔭女子大学 2010
- ・長谷 秀揮「保育実習における評価についての一考察」四條畷学園短期大学紀要2015
- ・田中ゆき江・辻野順子「学生の心的状況と保育実習評価の関連性について」関西女子短期大学紀要 2010
- ・田瓜 宏二 小泉裕子「実習担当者の持つ実習生のイメージと実習生に期待する資質に関する検討」鎌倉女子大学紀要（16）2009